

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 〔座談会〕 漢文教育の現状と展望

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高山, 実佐, 内山, 精也, 和田, 英信, 浅見, 和寿, 鈴木, 崇義, Takayama, Misa, Asami, Kazutoshi, Suzuki, Takayoshi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000206">https://doi.org/10.57529/0002000206</a>

〔座談会〕

## 漢文教育の現状と展望

◆ 國學院大學渋谷キャンパス 若木タワー八階〇七会議室  
◆ 令和五年八月三日（木）午後二時

高山 実佐（本学文学部教授 大学院高度国語・日本

語教育コース）

内山 精也（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）

和田 英信（お茶の水女子大学基幹研究院教授）

浅見 和寿（埼玉県公立高校教諭）

鈴木 崇義（本学文学部准教授・司会）

鈴木 本日はお忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。今回の座談会は「漢文教育の現状と展望」をテーマにしており、内山先生と高山先生は教員養成というところで、高山先生はいわゆる教員全般ということで、内山先生は特に国

語科の教員ということで漢文の指導をなさっていて、和田先生も、教員免許を取る学生も指導していただいていると。浅見先生は本学中国文学科の出身で、高校生を実際に指導・教育しているらしい。そのようないろいろな立場からお話をいただければと思っております。

昨年度、令和四年度から新学習指導要領が実施されて、高等学校教育においては、漢文は「言語文化」と、「古典探究」に位置づけられていくことになりました。漢文は、従来の思想、史伝、詩文というものを含めつつ、「古典及び近代以降の文章」とし、日本漢文、近代以降の文語文や漢詩文などを含めるとともに、我が国の言語文化への理解を深める学習に資するよう、我が国の伝統と文化や古典に関連する近代以降の文章を取り上げること。」ということが新学習指導要領（三八頁）に書いてあります。今回の改定は日本の歴史の中における言語活動で、漢文が大きな役割を果たしてきたということが強調されているのかなと私は受け止めております。実際、「言語文化」の教科書で漢文のところの最初を見てもみすと、なぜ古典の中で漢文を学ぶのか、あるいは、漢文と日本との関わりはどういったものかという文章が掲載されております。

そこで、まずは新学習指導要領について先生方がどのようにお考えなのかをざっくりとばらんにお話しいただければと思います。

### 学習指導要領と漢文教育の現場

内山 今回の改訂によって、日本語における漢文という視点が今までよりもやや強調されたとは言えると思います。ただし、

十六歳から十八歳の世代にこの変化がどれほどポジティブに作用するかという点に焦点を当てると、日本人が「国語」という教科の中でなぜ中国の古典を学ばなければいけないのか、という高校生にとって最も根源的な疑問に、今回の改訂が明快に答えているとは言い難く、従前に比べ著しい改善がなされたようには感じられません。日本漢文がより多く教材化されたことで、日本語の伝統における漢文の立ち位置が幾らか見えやすくなつたようには感じますが、それでもかなり控えめですね。学習の入り口の部分である、学ぶための動機が不明瞭だと、多くの生徒は積極的には向き合いません。

また、職務柄、現場教師の切実な声も私の耳に入ってきています。これは漢文に限らず、古文についてもほぼ同様の内容なのですが、大学受験のリアリティーのある学校、つまり進学校と、そのリアリティーに乏しい非進学校との間に、どんどん格差が開いており、全国でおおよそ半数を占める後者の学校では、従来のような形式の漢文（古文）授業がもはや成り立たないといえます。そもそも現代文ですら、相当に工夫しないと授業にならないと非進学校の教師たちは悲痛な叫びをあげています。いったい何が一番の問題なのだろうか、と考えてみますと、結局のところ、標準的な授業形式が、戦前からつづく「原文精

「読主義」を今なお堅持しているという一点にあるように思いますが、原文を精確に読解できることが、古文・漢文教育の目標として掲げられており、そのために漢文ならば返り点や句型の指導が徹底され、古文ならば文法や語彙の指導が徹底されます。しかし、戦前と戦後では「国語」を取り巻く言語状況が大きく変化しました。戦前は文語文体がなお現役でしたが、戦後はその歴史的使命を終え、言文一致体のみに統一されました。戦前では、文語文体を駆使できてはじめて一流の国語の使い手と見なされていたはずですが、そして、原文を精確に読解できる力に身につけば、文語文体を運用して自己表現する能力をもつという目標に大きく近づくという実用性がありました。戦後にはそのような実用性はありません。あえて実用性を挙げるのなら、大学受験にパスするという実利があるだけです。全国の半数を占める非進学校では、その実利を強調することもままなりません。進学校ですら、生徒の不満は決して小さくはないと仄聞します。そもそも、ひたすら試験に特化した教育というのも、かなり寂しい話ではないでしょうか。

**鈴木** 早速、高校における漢文教育に切り込んでいかれました。浅見先生は様々な高校で授業をなさっていますけれども、内山先生のお話を受けていかがですか。

**浅見** 学校によっては、漢文や古文の前に、現代文をちゃんと日本語として理解することが難しいところもあります。その理由としては、不登校になってしまつて中学校に行つていなかったで漢字の読み書きが苦手とか、日本語が母語ではないのでそもそも日本語がわからないという生徒も入ってきているからです。そのような状況の中、一斉授業という枠組みで現代文を教えるのもすごく難しくなっています。先日、二年生の「言語文化」で、初めて古文に触れてみたんですが、生徒たちは外国語を見るような目で取り組んでいました。もちろん内容を説明すれば理解できる生徒もいるんですが、ある生徒からはテストの解答用紙に、「なぜ終わつた文化、終わつた時代の文字、古文・漢文を学ばなければならないのか」と書かれてしまいました。生徒は古典に対してやはりこのような気持ちを持つているんだと改めて感じたところです。

進学校で授業していたときは、「古文・漢文が出題される大学を受験する、共通テストの国語でも必要になる、だから私たちは勉強するんだ」というモチベーションで頑張る生徒もたくさんいました。教員側としても、その部分で引っ張っていくこともあつたかと思えます。しかし、その進学校でさえ、『高校で漢文を学ぶ必要性はあるか』という授業を展開したときには、

意見は半々に分かれ、「漢文は大学で専門的に学べばいいんじゃないか」「漢文というものがあることは知っていたいけれども、レ点とか、一二点とか、文法事項を高校のうちにするというのはどうなんですかね」という生徒がいました。今からもう八年ぐらい前の話です。

今回、漢文教育の在り方を考えていく中で、学習指導要領において、科目の名前も、扱う教材も確かに変わったんですが、根っこの部分は何も変わっていないのではないかと思います。新しい教科書で漢文の授業をしたときに、生徒たちが「おもしろそう」とか、「取り組みやすい」となったとは思っていません。そこを何かしらの方法で改善しなければいけないんですが、皆様方からお知恵をいただければと思っております。

**高山** 新学習指導要領では必修科目が「現代の国語」と「言語文化」との二科目に分離されました。高校の授業で、実際の社会生活に必要な「話す」「聞く」「書く」という言語運用の力が身につけているのか、と言われている背景があります。教科書教材について教師が説明して、要点を黒板にまとめて、「分かった?」と言って、生徒たちは「はい」と言ってノートに書いて、「分かりました」で、定期試験もそこから出題される。



高山実佐氏

それは私自身の反省も含めてなんですけれども、ペーパーテストでの得点を目指すばかりではなく、「話す」「聞く」「書く」ことを学習活動に入れ、学校を離れた社会で通用することばの力を身につけさせる「現代の国語」を置く、そこまで高校の授業というものの変革が迫られているということが一番印象的でした。もう一つは、学習方法についても示されていることです。「主体的・対話的で深い学び」、アクティブラーニングなどと言われているんですけども、学習指導要領の歴史の中で、学習方法まで示された、そこまで告示の内容として入ったということも大きな改訂だと思っております。

漢文精読主義についてですが、上田萬年なども漢文精読主義

に対してやめたほうがいいと言っています。漢文を置き、書き下し文も必ず置いて、その分たくさん読ませればいいということとを戦後すぐの段階には言っていました。漢文に限らず、古文、現代文、いずれも数ページに何時間もかけて精読しますよね。

それだけではなく、もつとたくさんさんの作品に触れてほしい、多読の意義ということを考えてよいと思いました。新指導要領では「読書」が、全体を貫く知識・技能に位置づけられています。原文の精読のみを中心にした授業は、もうちよつと変わっていったほうがいいのかなと感じています。

**鈴木** 和田先生は、文学部で中国古典あるいは中国文学を選んできた学生の特徴とか、何かお気づきになることとかはありますか。

**和田** 先ほど、現場あるいは現場につながるようなお話を伺って、結構深刻だなと思ったんですけども、うちは入試科目で国語の中に漢文があるので、それを見ていると大体受験生の力が見えてくるんですけども、正直言うと、やはり力は落ちていくという感じはします。

ただ、全般的に落ちているというより、力のある子とそうでない子の差ができていて、好きな子は今でも好きで、しっかりと読めているという感じがありますね。

あと、これはあまり真面目な話ではないんですけども、非常勤で私立大学とかに行ったことが何度かあって、自分の狭い経験の中で得られた感覚なんですけれども、普通の漢文好きならこんなところまで行かないぞという非常に細かいところを好きな学生が、結構私立大学の中文系の学生に多いんじゃないかなど。そういう人たちは、力を上げてあげたいというか、好きなマニア心を満たしてあげるようなのがあればいい。うちはそういう学生は少ないですね。どちらかというと優等生っぽい感じで。さっき、漢文なんてもう要らないみたいなの、漢文教育に力を費やすことのむなしさみたいなお話だったので、そういう学生がいると、何かうれいというか、少し明るい話題として。

**鈴木** 國學院でも、中国からの留学生が割合としては多いですが、助動詞とか品詞分解とか厳密にやってくる学生がいて、慣例の読み方と古典文法にのつとつた読み方で違うところなんかを聞いてくる留学生がいます。

留学とは違いますが、外国籍の子供たちを担当したこともあるという浅見先生、国語科と、日本語を母語としない子供たちとの関わりというのは、何か気づかれたこととか、御苦労なさっていることとか、いかがでしょうか。

**浅見** 漢文教育から少しずれるかもしれませんが、日本語を母語としていない生徒の中でも、中国籍の生徒は、やはり漢字は分かるんですよ。例えばフィリピン、ベトナム等の非漢字圏の生徒は、漢字があると読めないし、意味も分からないとなる。その生徒たちをまとめて一斉授業で見ることが不可能なので、外国籍の生徒とそうではない生徒とで分けて授業を展開している学校もあります。

そうすると今度は、中国籍の生徒と他の外国籍の生徒で日本語を指導するときに、こっちの生徒は漢字が分かるけど、こっちの生徒は漢字が分からない。じゃあ、平仮名で全部やるのかという話になる。我々国語の教員も日本語学を専門として採用されているわけではないので、「日本語はどこから教えたらいのか」「『あいうえお』からやるのでもいいのかな」という話になって指導すると、「先生、それは既にわかっています」という生徒がでてきたりするわけです。これは一部の学校だけの問題ではなく、日本全体で結構大きな問題になっているような気がします。

**鈴木** 高山先生、そういった現場の先生からの問題はどのようにお感じになりますか。

**高山** 私自身の経験でいうと、以前勤務していた高校に会話

はできて日本語のほとんど読めない外国籍の生徒が入学したことがあります。国語科の教員が日本語教育の本を買って、放課後、一緒に勉強するというのを少し続けましたけれども、こちらにもわか勉強で効果的な学習になっているのかどうか手探りで、結局、特例として日本語教育の指導者に来てもらいました。まだ現場に余裕があった時期だったように思います。

それがもう十五、六年ぐらい前なんですけれども、今、公立中学校等では、取り出し授業という形で別室で日本語教育を受けていたり、同じ教室で支援員の方の補助を受けながら授業を受けていたりということを聞きます。浅見先生もおっしゃっていましたが、高校はそういう必要性の全くない学校と必要な学校と非常に差があります。小中の方は日本語教育について、国、教育委員会等で手配をしているけれども、高校では学校内の空気として、国語の先生、お願いする必要があります。今はそのいうことを耳にしています。

**鈴木** 高校の現場ではそもそも漢文というか、古典にたどり着けていない場合もあるかと思いますが、また、大学でも、様々な学生がいるなかで授業を行うのは本当に難しいと思います。

## 漢文教育と国語科

## 鈴木

ところで、日本の学校で国語という科目の中で漢文を勉強するとき、日本漢文あるいは文語文について、新学習指導要領では強調されているように思います。この点についてどのように考えるのかを次のテーマにしたいのですが、内山先生、いかがですか。

## 内山

日本漢文がより多く教材化されたことの意味は決して小さくはないと思いますが、やや遅きに失した嫌いがあるように感じます。教科書のどこを開いても、掲載されているのがほぼすべて千年以上昔の中国人の作品ばかりでは、生徒たちがこれをただちに「国語」の教材と捉えることは相当に困難です。そこに日本人の作品が掲載されていけば可視化されます。日本人がかつて漢詩や漢文、さらには訓読文体を用いて自己表現していた事実をただちに知ることができます。よって、「国語」のなかの漢文を考える一つの契機にはなるでしょう。

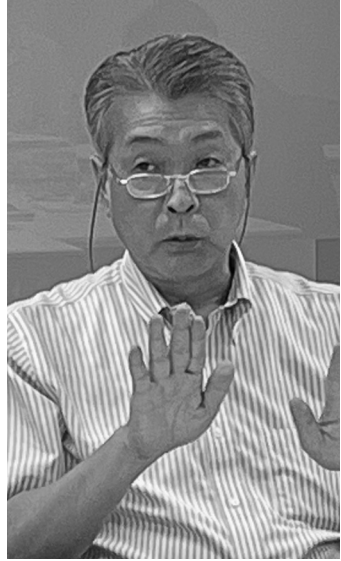
しかし、漢文が「国語」のなかにあることの意味をもっと明快に唱える必要があるのではないかと私は思います。一言でいいますと、漢文には大別して二つの重要な側面が内在すること強調すべきだと思います。一つは「翻訳論」的側面です。戦後の学校教育や大学受験はこの一点にフォーカスしている

いってよいでしょう。もう一つは「文体論」的側面です。前にも述べましたように、戦前は文語文体が現役でした。戦前の文語文体には、主に漢文訓読体と擬古文体の二種があり、漢文教育では前者の運用能力を育成することが重要な任務でした。

漢文を学ぶことの重要性を説く場合、往々にして奈良・平安時代等、日本語の草創期から語り起こしますが、これを強調し過ぎると、漢文は外来文化であり、はるか遠い昔の話で、自分たちとは直接関係ないという印象を生徒たちは抱きます。しかし、彼らが学校で漢文を教わるのは、より直接的には、明治以降、日本が国民国家体制に変わり、近代の学校制度が打ち立てられたからに他なりません。ひとまず、江戸時代以前のことには忘れて、一九〇〇年に小学校に国語科が成立して以降のことに焦点を当てるべきです。そして、近代国家日本において漢文訓読体が主要な文体として位置づけられていた事実をもっともっと強調すべきです。

その結果、はっきりすることは、漢文という教科は中国古典を学ぶことを最終的な目的とした科目ではなく、日本の文語文体の一つ、漢文訓読体に習熟することを第一に掲げた教科であるという点です。「翻訳論」的な原文精読主義の授業形式は、あくまで文語文体に習熟するための手段・方法にすぎなかった





内 山 精 也 氏

と考えるべきです。

五箇条の御誓文や教育勅語、大日本帝国憲法等々、この文体は主にハードな言説において多用されましたが、当時の青少年が通常の言語生活を過ごして自然と身につく文体ではありません。ですから、学校で教育する必要性があったわけですが、しかし戦後、文語文体が歴史的使命を終えたことによつて、「文語論」としての漢文訓読も実社会との繋がりを失いました。そして、「翻訳論」だけが残り今もなお大学入試で問われつづけています。しかし、大事なことは、もともとは漢文（白文）の翻訳文体であつたにせよ、「書き下し文」的文体＝訓読文体は、平安時代より戦前に至るまで、日本文語文の一大支柱としてあ

り続け、日本人の自己表現をずっと支えてきたという厳然たる事実です。特に忘れてはならないことは、遠い中国や日本の古代に限定され、過去に封印された言語現象なのではなく、十九・二十世紀の明治・昭和初期にあつても現役の主要文体として用いられていたこと、よつて純粹に日本語の問題なんだというのを、まずはきちんと説明すべきではないでしょうか。

現代中国語の教育が戦後、普及するにつれ、訓読に誤りが含まれることが声高に指摘されたり、中国の古典なのだから、中国語で読むべきだというような主張を目にしたり耳にしたりする機会も多くなりました。もちろん「翻訳論」の観点から漢文（訓読）の是非を議論し問題化することは意味のないことではなく、自由に行われて然るべきですが、「文体論」の意味を問うた時、漢文訓読ははじめて日本語において絶対的な意味を持ちます。漢文訓読文体なくして「国語」の中の漢文は存立できません。まず、この一点を漢文教育に関わる人たちは、何よりもはっきりと認識する必要があります。

とはいえ、何とも悩ましいのは、冒頭でも紹介しましたとおり、教育の現場からの悲痛な叫びです。漢文であれ、古文であれ、現代語訳によつて古典を教えるはいけなのか、という国語教師の声が日増しに高まっているようです。しかし、その声



和田英信氏

に推されて安易に現代語訳中心の古典教育に変えてしまったら、辛うじて形式的には存続している「文体論」的側面も完全に失われることになります。そして、一度失われてしまったならば、近代国家になって以後の日本が一世紀余にわたって育成してきた、祖先と繋がる文理解解も同時に失われることになるでしょう。その決断を下す前に、まだまだやる必要があるように思います。まずは漢文が究極的には中国古典を学ぶための教科なのではなく、すぐれて「国語」の問題であることを、「文体論」的側面から生徒にきちんと説明して欲しいと願っています。そのほか、今できる、ささやかな現実的な対策について（提言）も持っておりますが、それは後ほどお話しします。

和田 僕も素人なりに、この学習指導要領を見たときに、「現代の国語」というのが置かれたことが大きな柱かなと思っただけですけども、先ほどの高山先生のお話にあった気がしますが、作品があつて、それをいかに読解するのが正しいのかという教え方の国語というのではなくて、現代の私たちが使いこなす一つの言葉としての日本語というか、国語というのを学びましょうという趣旨じゃないかと思うんですね、「現代の国語」というのは。

そうしたときに、「現代の国語」という科目を立てた考え方が、漢文教材の選択などにも出てきているのかなと思っただけですね。現代の私たちが使いこなすものとして考えられている日本語というか国語の中には、先ほどの内山先生のお話にあったように、遺伝子としてどうか、血として漢文があつたわけですね。あるいは漢文訓読体があつたわけで、それが脈々と現代に伝わってきている、そういう意識かなと、指導要領を見たときに思いました。

そのこと自体は、僕は、「現代の国語」という科目を立てたことからいえば一貫していて、筋が通っているとは思いました。それが実際の高校とかの教育の現場でどのようにうまく機能するかについては、現場の先生に教わらないと分からないんです

けれども。有名な作品を読み解くというのではなくて、もっと使えるものとして、実用的な道具としての日本語を獲得しましょうということなのかなと思ったので。そうすると、昔みたいな正則の漢文というか、中国人の書いた正しいとされる漢文ばかりではなくて、日本人が書いてきた漢文とか、あるいは漢文訓読体があってもおかしくないと感じたんです。

**高山** 今回、一年生の全員が学ぶ「言語文化」に、日本漢文が位置づけられています。ただ、前の指導要領でも、選択科目には日本漢文が置かれていました。それが今回、必修科目に明記されたということは、今、内山先生や和田先生がおっしゃっていた現代につながる漢文を見直すということ、もう一つ、文化というもののや教科書教材・テキストと学習者を近づけようとしていることがあると思います。中国の古典、教養として知っておかねばならない、遠くにある漢文ではなくて、自分との関係を少しでも近く感じることができ、確かに自分の生き方に関係が強く出ていると感じます。

### 生徒の状況と国語科というフレーム

**鈴木 浅見先生**、今年は高校二年生までが新学習指導要領に

なっているかと思いますが、現場ではどのように変化しているのか、あるいは意外と変わっていないのか、教えていただければと思います。

**浅見** 今の時代を生きる生徒は、実用性を求める傾向が非常に強くなっていると感じています。Z世代と呼ばれる生徒たちは、動画もタイムパフォーマンスを考え二倍速で見るという状況です。つまり、今必要なものを、いかに早く手に入れることができるかに目が向いているし、時代もそうなっているということだと思っています。

そんな中で、過去には実用性があるものだと思って漢文を学ぶことができていたが、今の時代においては、漢文を学ぶ際に、何にこれが役立つのかというところを考えてしまう。漢文を学んだら英語を学ぶほうが実用性もあって、いいんじゃないかということも、しょっちゅう現場では言われているところですね。

先ほどのお話にもありましたが、漢文の教科書の冒頭に、なぜ漢文を学ぶのか書いてあります。学んできた私たちや大学受験をするような生徒たちは、それを読んで、「なるほど、確かに日本語のルーツはここにあるんだ、だから学ぶ必要がある」ということが分かる。けれども、さっきお話に出ていた他の多

くの高校では、教科書に書いてある「なぜ漢文を学ぶのか」といったものとか、「過去から学んできた歴史」を話したときに、「なるほど」となる生徒は圧倒的に少ないかなと思っっているところですよ。

そんな中で今回、日本漢文が入った理由としては、恐らく、日本と中国の関係性や、中国のものを私たちは学んでいるというのを少し抑えめにして、日本が漢文を文体としても学んできたし、翻訳としても学んできたということを意識させ、現代を生きる私たちに、ちょっと前の世代の日本人もやっていたことじゃないかという部分を強調したいのではないかと思えます。それでも、「なるほど。だから漢文を学ぶ必要があるのか」となる生徒はまだ少ないのが現状です。

もっと生徒の身近なものに近づけた方が良いと思います、高校生に親しみのある漫画を活用してみようと考え、先日国民的な漫画である『ワンピース』を題材にした授業案を作成しました。ある話の中で、「焚書坑儒」を扱っているんです。ただ、生徒は、そのことに全く気がつかない。しかし、漢文を学んでいる人から見ればすぐに分かることです。同じ漫画を見ていても、人によって読まれ方が違うよねという話を生徒にしたところ、自分が読んでいた漫画って、自分の知識と経験によって左右される

ものだというところに気がついたようでした。

教材で扱う漫画を知っているから、「あの場面って、そういうことなんですよ」と言っただけで、ちょっと漢文に興味を持つ。すると今度は教科書を超えて、「最近、世界史で中国史をやっている、この辺りをやっているんです」という話が出てくる。そしてその話を彼らの知っている漫画やゲームにまでつなげてあげると、漢文に親しみを持つてくれるという実感があります。

この間、大学受験用の参考書を執筆していたのですが、硬い文章だと生徒に刺さらないと思っただけで、『桃太郎』の文章を漢文にし、4コマ漫画もつけました。先ほどの『ワンピース』と同様、『桃太郎』に関してもほとんどの生徒が内容を知っています。生徒の経験や知識に合わせると興味を持つてくれる生徒も多くなると感じています。そのように考えると、今回の教科書の改訂で日本漢文が多く入ったのは、一定の意味があるのかなと思っっています。

**鈴木** 浅見先生から非常に苦心なさっている様子が報告されましたけれども、こういう現状を聞いていていかがでしょうか。

**和田** 教科書の、なぜ漢文を学ぶかというところを読んで、分かる人と分からない人の差というのは、多分、現在一番大きな問題ですが、今の浅見先生の話は、すごく分かりやすかった

ですよね。「ワンピース」の一場面でも、知っているのと知らないで、どれだけ読みが深まるかという言い方をすると、彼女と彼らには届かないのかもしれないですけども、そういうことですよ。

座談会が一番最初の内山先生の話も、そこでしたよね。届かない。現代の新しい学習指導要領ですから、どう変わっても難しい部分がある。

内山 学校教育の枠組みが、六・三・三と決まっています、それぞれの段階で教師ができることは限られています。どれだけ努力しても、古典教育の印象や内実を大きく変えるのはとても難しいと思います。ここで漢字・漢文の発祥国、中国の古典教育、つまりは漢文教育の今がどのようになっていくのか、ということを紹介いたします。結論からいいますと、中国では総じてかなり肯定的に捉えられています。理系大学への進学を希望するような生徒は不満を言うでしょうが、それでも幼稚園から大学の統一試験までは必死に古典を勉強します。

少し古い情報になりますが、約十五年前に上海と瀋陽に視察に行ったことがあります。小学校から高校まで一通り授業参観し、現地の教員とも交流しました。とある高校の教室で挨拶を求められ、日本にも漢文という授業があるけれども、生徒の受

けがあまりよくないことを紹介して、「皆さん漢文の授業は楽しいですか」と尋ねました。日本と同じような反応を予想したのですが、それは見事に裏切られました。多くの生徒が楽しいとしても重要だ、と答えたのです。この後、知り合いの若手中国学者を介して同世代の高校国語教師に意識調査をお願いしたところ、先の生徒の反応を裏つける回答が返ってきました。「現代文と古典の教育の比重はどちらに重きを置いていますか」という問いかけに対して、十名近くの教師すべてが古典教育をより重視すると答えました。現代文は生徒が読んで理解できるのに対し、古典はきちんと指導しなければ理解できないのだから、という至極もつともな回答でした。

日本との違いは一体何だろうと当時の私は正直考え込みました。片や中国は経済の高度成長期、片や日本は長期低迷期、政治体制も違います。そういう差がこの相違を生んだと解することもできますが、つきつめて言えば、社会的コンセンサスの相違なのではないかと考え至りました。つまり、国や社会の構えみたいなものが個々の子供に影響しているのだと思います。古典を必要とするか、必要としないかというのは、一見、生徒や子どもたちの声のようでありながら、その実、大人の声でもあるわけです。中国では、私が知り合った父兄の誰もがほぼ例外

なく古典教育を必要だと考えているようでした。

古典教育に携わる一人として発言するならば、今、古典教育は本当に瀬戸際にあると感じています。それは、先ほど浅見先生のご発言の中にもありましたけれども、日本政府が労働人口の不足を補うために入管法を緩めて、移民を積極的に受け入れるという方向に大きく舵を切ったことと関わりがあります。移民を多く受け入れたことによって国語教育の内実を変えざるを得なくなる現実を、国民国家体制の発祥国フランスを始め、西ヨーロッパはすでに体験しています。西ヨーロッパは大量の政治移民を受け入れましたが、その前後から、ラテン語教育が成立しなくなりました。移民の側からすれば、移住先の現代語、とくに生活言語を習得するのに精いっぱい、宗教や文化的ルーツが異なるのにラテン語を学ぶ積極的意義は見出せるはずもありません。かくして、古典教育が一気に衰退したといえます。

どういう目的と理由があるにせよ、移民を大量に受け入れれば、それまでの国民国家のなかの「国語」という枠組みは変えざるを得なくなります。生活言語よりも相当難しいところに「国語」という言語教育のレベルが置かれています。その中に、古典が含まれるのは、おそらく民族的アイデンティティーを高め

るためなのだろうと思います。しかし、祖国を遠く離れてやって来た移民にとって、それはまったく与り知らぬことであり、日本人ですら敬遠しがちな古典を学ぶ積極的な意義を見出すことは相当に困難ですし、教師の側からしても、出自の全く異なる子どもたちに実用性の担保のない古典を教えるに当たっては想像を絶する困難が待ち受けている、といって過言ではありません。

こういう事態が現実のものとなる日まであと何年あるのか分かりませんが、確実にその日は近づいていると覚悟しなければいけないでしょう。日本の生徒たちの古典離れという戦後ずっと国語教師を悩ませてきた国内的課題に加えて、日本語を母語としない両親の子どもという新たな課題が教師に重くのしかかってくる可能性があります。手をこまねいて、坐してその時を待つということだけでよいのでしょうか。それがさきほど「瀬戸際にある」と発言した真意です。

新たな課題が現実のものとなる前に、まず私たちは日本の現実を直視することから始めないといけないのではないのでしょうか。高校で古典の授業が成立し難くなってきたという現実から関係者が目を背けないこと、しかもその比率は全国的に増加傾向にあることをまず認識すべきです。その上で、「原文

精読主義」による授業形態の是非をも含めて、方法と内容をどのように変えていくのかということを早急に考えなければいけない瀬戸際に立っていると私は感じています。

今回の指導要領にもその方向性がすでに示されていますが、日本人の作品をより多く教材化して、漢文の日本語史における位置を可視化してゆくというのが、現状改善の第一歩になるでしょう。本当にわずかな一歩ですが、それによって多少は漢文を身近に感じてくれる生徒もいるかもしれません。範囲を広めて漢文訓読体の文語文を添え物的扱いではなく、中心教材の一つとして位置づけられれば、明治以降の文章もより多く教材にすることができそうです。たとえば、法曹の世界では戦後しばらく漢文訓読体の六法が使われていましたね。刑法は一九九〇年ぐらいにようやく言文一致体に書き換えられたと聞きます。ですから、それを少しばかり引いてみてもよいのではないのでしょうか。戦前の漢文訓読体の文ならば、それこそ五箇条の御誓文は典型的な訓読体ですし、近代国家日本を彩った多様な名文を教材として用いることもできます。そうすれば、「今ここ」に直結する例句を多様に示すこともできます。まず、漢文が決して他国の古典なのではないことを強調することから始めてみていいのではないかと思います。

### 漢文教育の実践

鈴木 内山先生から、古典教育が立ち行かなくなってくるのではないかとのお話もいただきました。とはいえ、やはり新学習指導要領では漢文教育は古典教育の中に位置づけられています。立ち行かなくなっている現実と、それでも漢文を扱わなくてはならないという状況のなかで、先ほど少し触れていたように思います。浅見先生は生徒のモチベーションを高めた、あるいはそれを維持するというところの工夫として、どのように実践しているのかということをお話いただけますか。

浅見 当時、国立教育政策研究所が出していた「平成十七年度教育課程実施状況調査」の中で、「古文・漢文は好きですか」という調査があったと思います。そのときに、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」の割合が、七〇%を超えていました。つまり、ほとんどの生徒が古文・漢文が嫌いだったところから始まっているのです。生徒が嫌いなものを教えるというのは非常に難しい。では、生徒が勉強してもいいかなと思えるのは何なんだろうと考えると、「楽しさ」しかないかなと思います。

生徒が漢文を見て、一つも読めない。「もう嫌だ。勉強するのをやめよう」となる前に、一度内容から入ってみて、「この

話はどこから来ているんだろうね」という逆算的な教え方もありなのではと思っています。

例えば「レッドクリフ」の映画が流行った時は、「ずいぶん昔の話なのにどうして当時のことが分かるんだろうね」と問いかける。すると生徒は「この本からじゃないですか」「あの資料からじゃないですか」と考えだす。映画や資料は日本語になっているけれども、そもそも「レッドクリフ」って日本の話なのか、という話につながり、そこから中国の原典、原文というのがあると気づく。そこでやっと、ちょっと読んでみようかとなる。授業の一番最初に「よし、原典読むぞ」となると、「先生、勘弁してください」となるので、最初の興味関心を引き出すものは、生徒が知っているもの、楽しいと思えるものにするといいかなど思っています。

また、教員側も楽しいと思って授業しているかどうかは結構重要だと思います。お祭りの時に、御輿を担いでいる人たちを見ると、何となく楽しくなったり、自分も担ぎたくなる瞬間があると思うんですね。あれを授業中にどれぐらい再現できるかというところもポイントかなと考えています。私が漢文に対して、お祭りの御輿を担ぐような楽しい授業をすることによって、「先生、すごく楽しそうにしているな」「良く分からないけど、

私もやってみようかな」という、ちょっとやってみようかなという気持ちを何回もつくった後で、「実は漢文には読み方というのがあるね」と本題に繋げていくという授業を、試行錯誤しながらやっているという感じでした。

進学校では、「この大学の問題はこういう傾向があるよね」「この作品を毎年出題しているよね」というところとか、配点の話まで全部して、「この部分は必ず暗記するだけで点数取れるよね」と過去問分析までした内容を授業で話していました。生徒も受験を意識しているので、非常に効果的だったと思います。このように、生徒のニーズに合わせた取っかかりを作って、生徒のモチベーションを維持したり、高めたりしています。

**鈴木** 教材などは、どういうものが好まれるとか、あるいは評判とか、面白がってくれたとか、何かありますか。

**浅見** 漫画でいえば、『キングダム』は、漢文教育の中では結構使われたり、話題になったりします。他には、昔ながらの「五十歩百歩」とか、「漁夫の利」なんていう故事は、もちろん漢文でも読みますが、最近では動画教材を活用しますね。動画教材は受動的なんですけど、漢文からはあまり内容が頭に入ってたなかったけれど、映像にすることで理解できるようになったという生徒も多いと感じています。



鈴木 漫画とか、あるいは動画という生徒が入りやすいような新しい教材も使っているながらということ、なるほど思いました。楽しそうだと感じてもらうこと、これは大学でもそうだと思うんですけども、教員側が楽しそうにしていると、「なるほど、よく分からないけど、でも面白いんだな」と学生が感じてくれ、そこから授業内容にも関心をもってくれることがあるというのは、実感として私もあります。

國學院大學では日本文学科・中国文学科の学生が中高国語一種の教員免許を取得できます。こういった環境もあり、この二学科にはどの学年にも少なくない学生が教員免許取得を目指しているように思います。また、私も学生から実習先で國學院大學の学生だからやはり、古典を、それも漢文を担当するよう言われたと、聞かされることがありました。高山先生は、漢文を教える際の工夫ということを教員養成という視点から、学生に指導なさっていると思います。目の前にいる将来学校の先生になりたい学生たちが、漢文や漢文を教えるということをどのようになら受け止めているのか、あるいは先生がどのようにお感じになつているのか、お話しいただけますか。

高山 学生への指導のあり方など話せるほどのことはないのですが、私自身が中国文学科ではなかったので、教員になった

ときに漢文を教える難しさというか、自分の知らないことの多さに大変苦労しまして、初任校の夏休みに教員向け漢文講座に参加しました。そのときに教科書教材の漢詩と思想と史伝と文章という四つのジャンルを改めて学び、一つ一つの教材の内容を教えるだけではなく、ジャンルの特徴をふまえて学習者と漢文とを出会わせることを思いました。「鴻門の会」「四面楚歌」などの史伝は、『項羽と劉邦』（司馬遼太郎）と横山光輝の漫画とを合わせてプリントにすると、生徒たちが漫画を図書館に借りに行くということができました。

国語科教育法では模擬授業を体験してもらうのですが、例えば漢詩であれば、漢字の意味を漢和辞典で確認し、その語から広がる情景、想像できる心情などを考えながら、映像やスライドなどを学生たちは上手に取り入れています。ヴィジュアルなものも活用し、その世界を学習者たちがイメージできるように工夫したり、春秋戦国の諸子百家などでは人生を生きる上でどの思想を取りたいか、というふうに比較して考える授業をつくったりしています。教科書を端から一つずつ読むというより、人間や社会・自然についてどのように考えられているのかを学ぶということを大切にしたいと思っています。学習者が、漢文を負担なく、できれば楽しく読める工夫、浅見先生のように刺

さるまではいかないのですが、何に注目すれば面白くなるのかを一緒に考えていきたいというところでしょうか。

**鈴木** 学生たちは、教育実習先で漢文を担当するように言われて戻ってくると、どのように先生に相談にのくるんですか。ちよつと不安だなとか、そういうことが多いですか。

**高山** それは漢文に限らずあります。皆さん、きちんと専門を学んでいて、それ以外の例えば中国文学科の学生は『源氏物語』などの授業に不安を感じたり、近現代や古文を専攻している人たちは思想や史伝、書き下し文や句法などに苦手感があつたりします。國學院大學では「古典教育研究」というプログラムも用意されていますが、国語科教育法では、教材研究の重要性、何度も読み、解説・注釈・参考書などに当たり、幾つもの訳を読み比べながら、最後は自分でどう解釈するのかということとを学んでおく、準備の大切さは伝えているつもりです。これまであまり触れてこなかった、こういう世界があると知ることこそが国語科の教員の醍醐味で、面白いことだと伝えていきます。

**鈴木** 苦手というわけではないが、同じ古典という中でも、日本古典、漢文とそれぞれ自分で専攻していなかったものを教えることへの不安が、どうしてもあるわけですね。

## 大学での漢文教育

**鈴木** 先ほど和田先生から、漢文は受験科目としてはあるんだけれども、やってきていない学生も結構多いのではないかというお話がありました。導入で工夫なさっている点とか、あるいは、自分はとにかく原文精読でいくとやっていらつしやるのか、そういったことを教えていただければと思います。

**和田** 僕の場合ですけれども、漢文の素材であっても中国語で読んで、よく使う教材は古典詩文を現代中国語で説明している文章を日本語に訳していくというものが多いですね、初級の段階では。ですから、漢文の読み方という形で教えることは、大学ではないですけれども、ただ、助字の使い方とかは漢和辞典を引いて、説明をしますけれども、そこは高校までの漢文と重なる部分だと思わんですが。教えるときに、訓読で説明することも、まずほとんどないですし、内山先生、どうですか。

**内山** 私は、学部と大学院で大きく区別しています。学部は国語科の関連なので、一年生対象の必修授業では原則、訓読力を高めるための授業を心がけています。これまでの主張と矛盾すると感じるかも知れませんが、学部ではなるべく源泉的な中国古典を教材として扱い、原文そのものに属する語法的な特徴と訓読に特徴的な定型的言い回しとを弁別しながら、この表現

は訓読側の問題、これは原文に属する問題というように説明するように心がけています。訓読なくして漢文は存立し得ないので、そのところは重点的に語っているつもりですが、学生にはあまり受けがよいくないですね。

現代中国語の学習が契機となって漢文に興味をもつ学生が一定数いることも分かっています。ですが、私のやり方はちょっと意固地なのかも知れませんが、中国語関連の話題は極力控えています。訓読力を身につけさせるという一点に絞っています。ですから、一年のときは、私の研究対象である漢詩もまったく扱いません。散文のみを扱い、それで漢文訓読体のリズムムムだとか、そういうものも身につくようにという目標で、授業を進めています。

大学院だと少し方針が変わって、日本人の学生にはなるべく中国語で読ませます。留学生には訓読で読ませます。中国の留学生が多いのですけれども、最初はもちろん苦勞しています。半年くらい過ぎますと、そこそこ立派に訓読できるようになります。

**鈴木** 例えば、教育実習に行きたいなんていう学生が、個別に指導を先生のところに来てたりなんていうことも。

**内山** ありますね。大体教育実習は五月から六月に集中しま

すので、かりに高校一年の実習になった場合は、導入教育をすることが多くなります。そして、実をいうと、漢文教育の現場で、教師としての力量が一番問われるのは、導入教育なんです。導入部分をもたせずに、きちつとスムーズに教えられるかどうかというのが一番の肝です。例えば、返り点の練習をするときに、教師は正答をただ教えればよいものではありません。誤答が出てきた時に、何が間違いなのかを合理的に説明できないといけません。導入教育では返り点の基礎を教えた直後に、通常、再読文字や置き字の説明をします。この教える順番にも明確な意味があります。再読文字と置き字は返り点の例外文字種ですから、これらを弁別し適切に処理しないと、正しく読み下すことができなくなるからです。これらのことを短時間で効果的に教えられるようになると、生徒から最初の信頼を得られるようになります。

そうはいっても、古典の教育はやはり教師のパーソナリティーによるところが大きいですね。楽しく授業に引き込む力量がある先生は、たいてい生徒に好まれます。先生を好きになると、その教科も好きになりますからね。そこが、国語の教室において一番大切な要素としてあるわけですね。

**鈴木** 確かに、浅見先生もおっしゃっていた、楽しそうにし



浅見和寿氏

てみせる。その先生を好きになってもらうというのも語弊があるかもしれませんが、教員自身が授業を楽しそうにしてみせることで、教科というか、テキストの面白さ、魅力というものを引き出す、生徒に感じさせるということはあるかと思います。

### 高校教員の研修

鈴木 ところで、学校教員の先生方には研修があると思うんですが、これは漢文だけでは難しいでしょうか、古典教育に広げてほしいと思うのですが、研修で何かなさされていることとか、あるいは先生同士でお話をしていて話題になったりすることはありませんか。

浅見 教員になって十年以上経ちますが、これまで様々な研修を受講してきました。最近の国語の研修では、「評価をどうする」とか、「ICTをどう使う」とかという方向にシフトして、国語の力をどのようにつけるかというところが、ちょっと薄まっているという感覚はあります。

また、私も研修の講師として教える側になる時もあるのですが、古典の指導方法を講義して欲しいと依頼されたときに、「私は漢文専門なので、漢文で行います」と言うと、「漢文は少ししか扱わない学校もあるので、ある一定の先生にしかこの研修が意味をなさなくなってしまう。できれば古文の指導方法を教えて欲しい」と言われることがありました。

私が初任者研修を受けていた時に、模擬授業を漢文でやったのは私だけでした。研修の講師として漢文でやりたいと言ったのも多分私だけだったと思います。主催者の意図によって、内容を変えることもあるんですが、漢文がそのような状況に置かれているんだと思います。古文まではやるけれど、漢文に割く時間がないという学校が一定数存在している。そうなると、そこに所属している先生方に漢文はこうやって指導するんだよと教える研修も校内・校外問わずできなくなっている状況があります。

初任者研修や五年次研修の際に、漢文について聞いてみると、漢文は苦手ですという先生が圧倒的に多くて、できればあまり授業したくないと思っている先生もいました。今までの教育課程ではほとんどの学校が「国語総合」で、四単位から五単位を一年生の段階で教えていました。その配分は学校裁量で、「現代文三で古典一、いや、漢文を入れて古典二でやるう」という学校もあったりしたものが、今回の改訂では言語文化の二単位の中に近代以降の文章が古文・漢文と一緒に入ってきたので、「二単位しかないから漢文までは教えられない」という学校も出てきている。漢文教育が今後どうなるのだろうかという不安感、教える側としてもすごくあります。

**鈴木** すごくショックなことです。せめて研修では漢文教育について触れて欲しいと思っていたんですが、まさかストップがかかるとは。国語の先生方の中で「漢文はちよつと無理だ」となってしまつと、一体誰が漢文を次世代に導くんだろうと思つてしまいます。

**高山** 教員研修が、どのような力をも身につけさせるのか、それをどう評価するのか、そのための言語活動はどうするのか、というところに重点が置かれているのは本当にその通りだと思います。特に、今、コンテンツからコンピテンシーと言われて、

そうした傾向は強くなつてきていると思います。ですが、学習指導要領改訂の「何を学ぶか」では「学習内容の削減は行わない」と示されていますし、学校現場の先生方は、それぞれの教科内容、漢文・古文・近現代の文学などについて、知見をしっかりと持つというところは大切にされていると思います。その中で、自分の専門としていない分野を学びたいという思いはあるはずですが、学習指導の方法だけではなく、内容に関する理解との両方がなくては良い授業なんかできないというのは、当然、思つていらつしゃるはずですよ。

面白いということがわかつている先生に教わらないと、学習者は面白いと思えないわけで、漢文を学習するために『ワンピース』のどこを材料にするのかというのは、きちんと勉強している先生でなければできません。そうしたご実践の例、現場の先生たちと漢文をつなぐ機会がもつとあるとありがたいのではないかと思います。

**鈴木** 厳しい現状があると思いますが、内山先生には、今のような状況でいかがでしょうか。

**内山** 細かなデータを取つたわけではありませんけれども、大学がどういう中等教育の教員を輩出しているかということも少し関係があるように感じます。一般の人々は、漢文教師と

いえば、大学で専門的に中国文学なり中国哲学なりを学んだ人だと思つていると思います。しかし実態はどうかといえ、少なくとも中国文学専攻のある大学の多くは、中国語の教員こそ輩出してはいますが、高校の漢文教師を輩出してはいません。

それに対して、古文や現代文を教える教員は、それぞれ大学で専門的に勉強した方が過半を占めると思います。ですから、国語科の教員で古文と現代文担当の教員は、大学時代の専攻と密接な関係にあると思いますが、漢文の場合、この図式が当てはまりません。多分、高校の国語科のセクシヨンの中で、中国文学あるいは漢文を大学で専門的に学んだ教師は、絶対数が相当少ないと思います。そうすると、国語科の中の発言力は当然弱まりますし、専門外の人が漢文を教えなければならなくなります。

たとえ現行のカリキュラムの中で軽い扱いであつたとしても、漢文は、指導書片手に手軽に教えられる教科ではありません。古文以上に、関連の学識や精読経験の有無がものをいう教科であるという現実があり、授業時間が少なくても、この事実に変わりはありません。専門外の教師がこの教科を担当する場合、要点だけを教えてなるべく早く飛ばそうという心理が働きますし、同時にびくびくしながら教えていくことになります。それに対して、たとえば『源氏物語』が大好きで卒論も源氏で

書いたという先生が教える『源氏物語』と、どっちが生徒にとつて魅力的かといつたら、結果は言うまでもありませんね。こういう構造的な問題というのも多分にあります。

それと、現代中国における漢文教育の話をしました時にも言及しましたように、生徒の古典離れという問題は、大人社会の価値をそのまま映し出した鏡なのであつて、大人たちがどうでもいいと思つていることの反映なのだと思います。ですから、それをひたすら子供たちに押しつけるのも可哀想だと思えます。どれだけ文法を一生懸命勉強して、原文を精確に理解できたとしても、実社会がそういう能力を高く評価してくれるわけではありません。戦前とはこの点が大きく異なるわけです。ですから、こういう現実のなかで古典教育がどうあるべきかという問題は本来、指導要領を策定する側の人々が、授業方法を含め、もつと早くに議論すべきだったのではないかと思います。現場の教員に出来ることは先に述べましたように非常に限られています。

大学において、原文精読主義が主流になるのは当然だと思えます。方法論は音読・訓読といういろいろあるでしょうけれども、原文を精確に理解できない人が教師になつてもらつては困るわけですから……。しかし、大学までのプロセスにおいて、それ

と同じことを求めてゆくのは、時代的なズレが顕著になった時点で、本来なら相応の手当をしておくべきだったのではないのでしょうか。古典教育をめぐる言語環境が激変したにもかかわらず、戦後も戦前とほぼ同じ形態と内容の授業が保持されました。敗戦から時が経つにつれ、高校の性質も大きく変化しましたし、なにより、訓読体という文体が敗戦まで用いられていたという記憶が、社会全体から完全に失われつつあります。こういう顕著な変化には目を閉ざし、旧態依然の授業内容を続けてきたのが高校の古典です。原文精読主義を堅持するのであれば、生徒にも社会にも説得力ある形でその意義を説くべきです。私は戦前の文語文体について語らない限り、国語の中の漢文を説明することは、生徒にも社会にも響かないと考えています。

しかも今、一部の公立学校では、現在すでに西ヨーロッパと同じような状況が出来始めています。日本語を母語としない両親の子どもが増加し、現代文ですら従前と同じ形態で授業を進めることが困難になっていると聞きます。いわんや古典をや、です。

しかし、漢文にシンパシーを持つ一人として、「漢文Ⅱ中国古典の学習」と思い込んでいる人々に、そうではなく「日本の文語文体の学習」であることを、最後の瀬戸際に訴えたいと思

います。

**和田** すごく深刻ですね。漢文の問題というのが、さつきまで生徒に向かってだったのが、生徒どころか、先生のほうに。漢文にシンパシーを感じてくれる教員を、どうつくるかということですね。

実用もいろいろあると思うんですけども、漢文とか古典は実用的でない。でも、文学とかも実用ではないと言われるんですけども、文学のない人生はつまらないですよ。その辺まで下りていかないと、なかなか分かってもらえないのかなというか、文学は楽しいですよ。漢文も面白い。教える側が本当に面白いと思っていないと駄目ですよ。方法ということでは、今、明らかに変わったのは、生徒をどうするか以前に、先生をどうするかですよ。それは本当に、かなりしっかり考えないと、漢文教育が全然そもそも成り立たないことになるんじゃないですか。

漢文って、コスパのいいものだと思うんですよ。労力が少なく、外国の古典文化・文学にアプローチできるわけですから。先の人生の楽しさということを考えたときには、何とか残したいですけども。



(司会) 鈴木崇義氏

### それでも古典を学ぶ意義

鈴木 様々な問題を抱えつつも、最後は明るい話題にしたいと思います。古典、漢文で、学ぶ意義とか、あるいは教育をしていく上で、何かよかったと思うこととか、あるいは、これだけは絶対に守りたい、教えたいとか、そういうこと等、何でもいいのですけれども、現代、古典をそれでも学ぶ意義について、お感じになったことをお話しただければと思います。

浅見 古典を学ぶ意義を生徒に伝える時、教科書の言葉をそのまま伝えても心に響かないので、「よりよい人生を歩むときに必要なものかも」とぼんやり伝えるという感じです。実際、生徒には、「生きるためにマストなものではない。これから君

がどういう人生を歩むかも分からないし、未来がどうなるか分からないけれども、学んでおくと、人生が豊かになると私は感じているよ」と伝えて、漢文と実社会が結びついた自身の経験や体験を話しています。すると生徒も、「そんなもんかな」という顔をして聞いています。生徒の中でも漢文がそういった位置づけになってきていると感じています。漢文を学ぶ意義とか、古典を学ぶ意義を至極真つ当な言葉で伝えても生徒は全然ピンときていないように思います。

高山 古典・漢文などの学習から遠い工業高校で漢和辞典をひく授業をしました。平仮名と片仮名と漢字とローマ字と、四種類の文字を私たちは使い分けている、その中で漢字はそれだけで意味が分かる表意文字で、すごいよねということからでした。ひらがなのみにしたコラムを漢字交じりに直す、部首の意味を確認する、将来、もし子供に漢字で名前をつけるとしたら、何とつける？など、行っていました。一文字にどれほど多くの意味を見出すことができるか、漢字という文字を学ぶ意味は大それだと思っています。

そこから漢文に行くんですが、日本の古典として取り入れられた漢文の背景・文化、その具体的な受容などは、「今・ここ」に至るまでを、時間的なこれまでと隣国中国という空間的な広



がりとの中で考えることにつながると思っています。教師用指導書はありますが、こちらが「なるほど」など思えることではないと、生徒たちに面白いかもしれないと思ってもらえませんか。例えば、科挙の制度、漢詩の魅力、『論語』にちなんだエッセイなどを読みますと、社会制度の違いや異なる文化の中で生きる人間の心情、一方、変わらぬものの発見もあります。自分が面白い、伝えたい、一緒に考えたいと思えると、授業でも関心をもたせることができるような気がしました。

他に、先ほどから出ていますが、多読ということ。漢文と書き下し文との両方で読めば、もう少したくさんの量を読むことができ、たくさんの方が読めれば、漢文のもつ面白さにも気づいていけるのではないのでしょうか。また、漫画やアニメの活用。例えば『源氏物語』を読みたいという高校生は、ほぼ一〇〇%、『あさきゆめみし』が面白かったと言います。今の高校生、中学生たちが漢文を読んでみたい、と思うきっかけになるものをダイレクトに教室に持ち込む授業がもつとあっていいのではないかと、思いました。

和田 二つ思ったんですけれども、一つは、漢文という言葉は、高校の教科の名前でもあるし、あるいは、訓読という方法を使ってアプローチをする中国古典文学であったり、あるいは、

中国古典文化とか文学そのものを、漢文と昔は言ったわけですよ、方法によらず。だから、古典文化とか文学に関心があれば、訓読法を経由しなくても、まず関心を持ってもらえればいいのか。だって、漢文が要らない人もいるわけだから。それこそ『キングダム』が面白ければ、それも漢文じゃないですか。いずれまた、それを原文で読んでみたいとなったときに、漢文訓読という方法が日本人には昔からあったと思いついてもらえませんか、その程度でいいかなという気もしてきましたよ。

あともう一つ、今日お話を伺っていて感じたのは、自分は大学にいるからですけれども、大学の学生たちは一応、漢文の実用的側面というか、実利を受け取って大学に入ってきたわけですよ。漢文を勉強しておけば、大学に合格するということ。彼女たち、彼たちは、漢文とある程度付き合ってきたので、そういう意味では、大事にしないといけないというか、漢文について、ある程度慣れ親しんできたわけなので、もう一歩、漢文の魅力みたいなのを伝えたりすると、まだどこかに戻っていくというか、そういう機会も出てくるのかなと思いました。

内山 漢文教育の将来に関して、私はあまり明るい展望を持ってませんが、国語の中における古文と漢文、あるいは現代文の関係性みたいなものを、もう少し教科の中で明確化した方がいい

いのではないかということは、日頃から感じています。

国語という教科の中で、小学校一年の時には、教材にほとんど漢字がありません。学年が上がるにつれて、漢字や漢語が増加します。高校三年や大学入試になると論理性が高く漢字・漢語が頻出する文体を扱います。もちろん、それとともに文章の難易度も上がります。仮名や和語の比重が大きくなると、その文章はより感覚的、情緒的になります。その分、生徒たちに身近で柔らかな印象を与えます。それに対して、漢字や漢語の比重が大きくなると、疎遠で堅い印象を与えます。この印象の相違は文字のもつ視覚的印象だけでなく、漢字・漢語と仮名・和語がそれぞれ日本語表現の伝統において担ってきた役割が違うことに大きく起因しています。

一言でいえば、漢字・漢語は主として概念や制度等、目に見えない抽象度の高い事象を言語化する役割を担っています。そして、漢文や訓読文体はそれらをロジックで結びつける文体であったわけです。現代の言文一致体の文章には、文語文体の痕跡はわずかにしか残っていません。主として感覚・情緒を担ってきた和文と論理・思想を担った漢文のそれぞれが一つの文体に融合され、文語文体との連続性が見えにくくなっています。しかし、国語教材の学年的変化や難易度といったところに、和

語と漢語が伝統的に担ってきた役割を見て取ることが出来ないでしょうか。

最初は皮膚感覚的で、子どもたちが日頃感じているような日常卑近な内容の文章が教材化されています。そして、小学校の高学年あたりから高校に至るまで、徐々に文章内容の抽象度が上がっていきます。最終的には評論教材を中心とする論理中心の文章に転じていきます。こういう変化の中で、漢字・漢語の比重が高まってゆくわけです。論理性というのは、日本語という枠内に限定されるローカル・ルールではありません。いってみれば、世界に通じる普遍的な公器です。これを生徒に身につけさせること、それが言語教育としての国語の社会的使命なのだと思えます。そして、伝統的には、漢文や訓読体はその役割をより多く担ってきたわけです。現代でも漢字・漢語がその中心にあります。

ただ、誤解のないようにいいますと、私は仮名・和語の役割が軽いと言いたいわけではありません。どちらも同じように重要です。人間の行動は七・八割が感情によって決定され、論理はせいぜい二・三割だともいえます。自分の感情を他者にきめ細やかに伝える言葉がどうしても必要です。ですが、大人の社会は感情過多な言葉だけでは回っていきませんね。論理性の低

い言葉は、顔の見える範囲ならともかくも、大きな組織や社会全体には響きません。だからこそ、社会に出る前に、論理性を獲得させる必要があるわけです。論理性を獲得すると、言葉に普遍性が生まれます。言い換えると、翻訳可能な言語になります。そうなれば、伝えたい思いや考えが国境を越えていきます。

言文一致体に統一されて久しい現在の日本語文体において、論理的な文章をきちんと理解し使いこなせるのか否かというのが一つの大きな分かれ目だということを、国語の先生は生徒に説いて欲しいと思います。具象から抽象へ、感覚から論理へ、この転換は日常生活言語にとっぴり浸かっている生徒にとつては、ある意味、苦痛とさえ感じるくらいに頭の集中が必要となるかもしれません。でも、ここを突破できないと、論理性、すなわち言語の普遍性を獲得することが難しくなることを教えて欲しいのです。そして、現代でもなおその中核をなしているのが漢字・漢語です。かつてはそれにプラスして訓読文体があつたわけです。

飛鳥・奈良・平安時代の人々は、日常卑近な言語ではなく、論理性を獲得するために、漢文にアプローチした可能性があります。たとえば、仏教の経典は抽象的論理で埋めつくされています。その抽象的論理が漢字によって表記されていて、それを

学びとらなければ、仏法や仏理は理解できなかったわけです。仏典を理解するということは、抽象論理を理解できるということとを意味し、そうならば言語の論理性＝普遍性を獲得することにも通じます。儒教経典のばあいもまったく同様です。かつて、抽象論理の中核的役割を担っていたのが、漢字・漢語であり、漢文であり、そしてまた漢文訓読体の文章でした。そして、この伝統は、文体が消え一部カタカナ語に変わったという大きな変化があるとはいえ、今なお姿形を変えて続いています。

ただし、文体がすでに用いられていないという現実の重みはけつして小さくはないと思います。原文精読主義で戦前と同じように授業を進めることにどういう意味があるのかという問題は、常日頃、私も自問自答しています。なかなか妙案は浮かんできませんが、かといって安易に現代語訳中心の授業形態に変えてしまえば、百年余にわたって国語教育が守ってきた大事なものがにわかに崩れ去ることも確かです。ですから、一気に急転換するのではなく、現状にマイナーチェンジを加えた上で、変更可能な方法をまず模索すべきではないかと私は考えています。マイナーチェンジというには大きすぎる改変かも知れませんが、まず漢文の教材は書き下し文(訓読文体)を中心に掲げ、訓点を付した原文を小さく表記します(この表記は、「国語総合」

です（に用いられています）。日本の訓読体の文章を採用するのであれば、原文に相当するものがないわけですから、現代語訳を代わりに掲載してもいいでしょう。そして、繰り返し朗読して文体的特徴が朗読の実践を通じて体験的に身につけられるよう授業展開していったらどうでしょうか。内容理解については、陶淵明の「五柳先生」的読書姿勢「甚だしくは解するを求めず」でいいのではないのでしょうか。つまり、原文精読主義と現代語訳中心主義の中間を基準とする、という提案です。生徒の需要に応じて、基準を上下させられるような柔軟性を指導要領に明記できれば、なおさらよいのではないかと思えます。

実は戦後八十年の古典教育史において、近年とても大きな、ひょっとしたら最大級の変化があったことを、中学・大学の関係者はあまり詳しく知りません。それは、小学校に古典の暗唱と朗読という言語活動が加えられたことです。分量はけっして多くはありませんが、「無」から「有」への変化は絶大です。この変化を古典教育に活かさない法はありません。現行の古典教育は、おそらく現代文の基礎ができてから始める、というカリキュラム設計の下、高校から本格的に開始されます。しかし、私はこの設計自体が古典教育をととても難しく感じていると感じています。なぜならば、高校生は言語の発達段階です（にかなり

高いレベルに達しています。ロジカルに物事を考える力を備えています。この段階に達すると、何か新しいことを学ぶ際に、応分の報酬を求めます。しかし、今の古典教育には実用性の担保がありませんから、彼らのテンションも総じて低下します。そういう生徒たちに、暗記しなさいと言っても、たいいの生徒は嫌がります。「覚えて何かいいことあるの？」と生徒たちはきつと心の中で呟くに違いありません。

ですが、同じことを小学生に求めたならば、きつと多くの児童が喜んで取り組むでしょう。しかも、暗記のスピードも確実性も高校生よりずっと良好なはずです。こと暗誦という一点に限れば、高校生・中学生よりも、小学生の方が圧倒的に適した学齢です。そして、たとえ正確な理解が伴っていなかったとしても、暗誦の結果、小学生の段階で古典の一節が身体的な記憶になっていたならば、中等教育の古典教育はその身体的記憶に理知的な意味を与えるということから始められるのです。たとえば、「うさぎおいしかのやま」という文言に対し、「ウサギを食べちゃうの？」と疑問を感じている生徒に、その疑問を解くことから始められるのです。こういう好機が生まれているにもかかわらず、中等教育の現場でこの変化を強く意識した授業が展開されている例を私は知りません。小学校の暗誦教材を中学

や高校の先生方も深く関与して、よりよいものに作り変えてみたらどうでしょうか。また、暗誦中心の古典教育は、ぎりぎり中学一・二年生くらいまでは延伸できるのではないのでしょうか。こういう進め方が是認されれば、少なくとも自分の体内にある、意味不明の言葉が意味のある言葉に変わる瞬間を、生徒一人一人が体験できるようにあります。これを古典教育のテコとして活用できるのではないかと思います。ただし、現代社会には、暗記⇨苦痛⇨悪という通念が根強く存在しますので、こういう社会通念とも闘っていかなければいけませんね。そして、古典にシンパシーを感じる面々が、小学校から大学まで、協力し合っていて、知恵を出し合わなければいけないのではないのでしょうか。漢文（古典）教育に関わる全ての教員が、まずは小学校で行われている言語活動に注視し、それを各々の領域で活用し実践することから考えてみてもよいはずだ。

繰り返しますが、坐して撤廢の時を待つのではなく、やれることは全てやって、生徒たちや社会の目を変える努力をしてみようではありませんか。

**鈴木** 小学校、中学、高校、あるいは大学の枠を超えた合同の研修とか、学校間で何か交流ができれば、これは可能かもしれないですね。

なかなか古典を学ぶ、教えるということに対しては厳しい現実がありますが、それでも、論理性とか、あるいは戦前戦後の教育という枠組みをどう捉えるかということは大事なことで、一方で、様々に古典に関連するものを含めながら工夫を凝らし、古典は現代に生きる我々にも楽しいものなのだということを広く知らせていくことはすごく大事なことだろうと思います。また、現代の言語活動の中にあっても、漢文は日本語の形成や普段使用する論理的な文章にも密接に関わってくるものである。そういう大きな枠組みの中に漢文というのが位置づけられている意義を、今回は確認することができたのではないかと思っております。

まだまだ考えていかなければいけない課題も見えてきたところで、今回の座談会は結びとさせていただきます。本日はお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。